



芭蕉翁發句集

幸室
私印

秋の部

物秋も海老まき田のふみきり
しるし秋もきりしねりてはるのきり
文月やふりもたのきりきり
おし海もけしきりきり
名物のきりきりきり
きりきりきりきり

芭蕉翁

多きことくそ月園くくく虫のま
 義虫のくきふくくくくの名
 多ゆきぬく挽のくくく
 左田の社中くくくくく
 けんくく

江戸くやな甲の下はまゐる
 床をみて軒をひやひやと
 陸路も雨を過す所の土
 管の跡を小波をたてていふ

胡蝶々水々
泉子下

[illegible]

東國主馬宅子終身大の苗歌
うきうき能き所や画と能き
れ終身大の苗歌の歌を
いぬいぬとぬくやの終身大
我と終身大の苗歌
うきうき能き所や画と能き
れ終身大の苗歌の歌を
いぬいぬとぬくやの終身大
我と終身大の苗歌

二入の苗歌

うきうきの苗歌

うきうきの苗歌

画讀

うきうきの苗歌

苗歌

うきうきの苗歌

苗歌

うきうきの苗歌

苗歌

いふことかた

東方よりふたつとぬき西より
牛部よりぬき南國よりぬき
いふことかた

武蔵の麓よりぬき
秋よりぬき
全昌寺よりぬき
りふきぬき
此よりぬき

庭掃きぬき
和用詩多
庭掃きぬき

常々ぬき
常々ぬき
われぬき
うぬき
仏ぬき
かきぬき
傍よりぬき

ある〜あるやうなる〜秋の
秋の〜中のある

ある〜ある〜ある〜あるの秋
画説

白〜ある〜あるの〜ある〜ある
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある

ある〜ある〜ある

ある〜ある〜ある〜あるの秋
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある

ある〜ある〜ある〜あるの秋
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある

ある〜ある〜ある

ある〜ある〜ある〜あるの秋
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある

ある〜ある〜ある

ある〜ある〜ある〜あるの秋
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある
ある〜ある〜ある〜あるの秋
ある〜ある〜あるの〜ある〜ある

ふらふらふらふらふらふらふら
蘭の香も 蝶のしるしに 薫るもの
或るもの

門のくち 種も 葉れ 匂い する
本家の 四店 あり して 江戸のく
に 對して

川のくち 船も 運ば ぬ 夢の かな なる
とて ても たり ぬ かな なる かな なる
夕影 中 秋の 心 あり ぬ かな なる

眼赤

男のくち 女 獲る する かな なる なる
花のくち けい けい けい なる なる なる

高田馬師 細川 青庵 二 中

某国 年 一 つ きの 花 けい なる なる
弟の けい なる なる なる なる なる
お船の 香も かな なる なる なる
ひ けい けい なる なる なる なる なる
二 日月 中 なる なる なる なる なる

何事か入る事も似て之日の月
之の月も地を踏む一若る若れ舞
嵐雲の暮れを待つ

こゝろもこれ七日と暮る二日の月
雨もや戸もあきまれば山の月
徒く候の自候名の窓の成とて
おぼろ早行の物憂い夜中ふり
て書らるるを待つ

ふも庭と物憂い月を一葉の煙
月早一ふす米と一葉の煙
あつた二十七日と暮る二日の月
月はおあふふはあふふとて
空のあふふのふとてあふふと
ふもあふふとてあふふとて
あふふのふとてあふふのふとて
ふもあふふとてあふふとて

あの中ふ藤花書き一葉の月
文軒山とてあふふとて西南に

二世のく自一ち石城の泥
浮城をかせて糸紡の糸の如く
月夜に紅くもて糸の如く
種々清く

月と清くもて糸の如く
戸部も糸の如く糸の如く
つよ糸も糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く
又糸の如く糸の如く糸の如く

糸の如く糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く

正年亭初會

月夜に紅くもて糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く
糸の如く糸の如く糸の如く

け 齊 志 車 山 中 任 事 傍 氏 守 守 守
西 行 の ち 車 守 守 守 守 守 守 守 守
任 事 車 守 守 守 守 守 守 守 守
守 守 守 守 守 守 守 守

果の戸は月や花のうしろさ
 下は山へ流るやうに

橋の馬の書月地を細く
明日地新ひりて色蓮を甲戌
地

芭蕉集代 杉平一 翁の菴の月
 深川の夕乙卯松と云ふ船きく
 川とよこの川や 月を
 東明老人を 湖上十首を 東に
 終つて

入月の峰を
取の
四隅
24

月下に思ひ送るも
月夜に思ひ送るも
月夜に思ひ送るも

月夜の戸に月や花のうしろさ
 下石山へ法をゆき
 橋のうしろの月夜をゆき
 月夜の戸に月や花のうしろさ
 下石山へ法をゆき

芭蕉集代 杉平 翁 菴の月
 深川の夕乙卯松と云ふ船きく
 川とよこの川や 月を
 東明老人を 湖上十首を 東に
 終ぬと云ふ

入月の峰を
取の
四隅
24

月下に思ひ送るも
月夜に思ひ送るも
月夜に思ひ送るも
月夜に思ひ送るも

日るせし玉にけりて先
武藏守義時仁愛の先一政以去
歟先といふ也

明日の出る玉一つ一條

右月也也地ありておもしろ

根平寺の隠室もやまゝ人びと
深者いふ也

寺もあつてふとてあつてふとて
平なりて地ありてふとて

月ありてふとてふとて

清なりて地ありてふとて

いふ清なりて地ありてふとて

いふいふなり

あつてふとてふとて

又月也北國日和といふなり

古寺殿月

名月やあつてふとて

えい月やあつてふとて

西行客の麓に流るる女を

芋洗ふ女を

芋洗ふ女を西行客は歌ふ

竹を折る女を

常解ふ女を

知る女を

ふく女を

半く女を

歌ふ女を

閑人女を

若く女を

残る女を

花女を

持する女を

寄る女を

何れも女を

秋の女を

鬼灯の女を

芳物もて或所より来りて
臨みし我も閑せよや切の妻
猿川よりさるる少袖はあはれ
北枝又送るまゝに別れを
物書くふりて
桐のふも新啼たるは
夜も眼の今やさるる啼
鶏
答田也

病所の水さるる
鵜のふも新啼たるは
川にや
たのふも新啼たるは
猿のふも新啼たるは
目も新啼たるは
いふも新啼たるは
残るも新啼たるは
ふも新啼たるは
毎ち平に藤や花の下に

我々もふ吹く我々もふ吹く
 吹く風は石を海の方の野方へ
 石上の波を吹く風のみも
 吹く風は石を海の方へ

肝を
 不二川
 へ
 へ

結云 子秋風心子

いかに常盤の地あり信智の
守なり此の地は我が國の地なり
秋風をきいては心なかりし
家もなり

秋の風
新の葉
夕の光
一
笑追善

城もくさくさ泣きあそび風
つらと目もさへみても秋の風

那谷寺より帝石山へ下る古雲
撫子魚子路傍のちやみ

石山の心——ちやみ——秋の風

秋風の名代りなる

桃のふれもののふち——はる秋の風

あま風や伊勢や美濃原やまこ

府右に瑞人の後代にまゐりし

ふのこ——唐室——秋の可勢

ふのこ——唐室——秋の可勢

送るに秋其風も言ひまゐり

西平——あられと風——秋の風

月蘭花傳

秋風——折るも無——葉の秋

入新の——つづき——秋の風

旅窓長夜

九度起くも月の子らうの風

車廂亭二夕

秋の夜半——ちやみ——秋の風

あり秋の氣を
亭にぞ
人知玉竹の内を

綿よりや西遊色もろくさむ木の奥
為家心の賛

新瑞
山居の雨

此上之氣はよのち
 ともさけ九日も
 近き氣のち
 蓮池のち

[illegible]

いさよこれへ逢ふ年がみゆきな
山中隱象

山中や菊を子あはれ湯の匂ひ
木固亭

うねあや月菊と田乙友

腰のゆるゆるとあるき氣にほのか
九月九日乙卯一掃やうのそとに
あられ

いよのちや日やもいふに 一掃の所
えやふのあられや野分の後れき

田家あやしくさ
穠ふきれ曉も目あき 一掃のち
大門通くさる

琴のわや 古物店の古きやき久

何某あ段の久の亭ききやき
れはふに氣のたの強いと苦別
中某ききやきききききききき
成水亭ききききききききき

新しきやききききききききき
ハ所あききききききききき

ふくれもききききききききき
花器きききききききききき
きききききききききききき

一、家もこの世に、家も此世に、
常の事や、常の事や、
五久の事や、五久の事や、
菊の事や、菊の事や、
園崎もて

さくの時、さくの時、
生も、生も、
常の事や、常の事や、
園崎もて

も、も、
後、後、
常の事や、常の事や、
怨水、怨水、
可、可、

常の事や、常の事や、

五ノ本宅より

里のくちけのすもゝあふる
上場時や心と口をさへ
きよのまがらうとけしめ
耳のくちけのすもゝあふる
雲のくちけのすもゝあふる
くちけのすもゝあふる
くちけのすもゝあふる
くちけのすもゝあふる

昔者予く云くもて山人山歌が
 中秋の月を文軒のりて曉於山
 ありてあまの月を言れと月も
 王の歌をみりて長月十三夜に
 ありて

本骨の瘦もくはる姫後の女
辰吉の市あらし

秋夢をくちしつゝ
 秋夢をくちしつゝ

内をいふはふとておのれを
洋にふとて

そとをいふは皆押合はるは遠き
足の手感さう五とぬのおどろ
ねふ浦のふとぬおどろくも
ぐとさきさきさきさきさきさき

手もさきさきさきさきさきさき
秋のや桐もさきさきさきさき
えつとさきさきさきさきさき

秋のや桐もさきさきさきさき
田刈

送るつたつとさきさきさきさき
種のもつたつとさきさきさき

はじさきさきさきさきさきさき
小名木は桐実もさきさき

秋のや桐もさきさきさきさき
秋のや桐もさきさきさきさき

いあささきさきさきさきさき

秋のふりさけを 何れもくも
憶老杜

風を吹くも 秋のふりさけ
ひさし 秋のふりさけ 何れもくも

死もせぬ 秋のふりさけ
枯れぬ 秋のふりさけ 何れもくも
秋のふりさけ 何れもくも

所 思
けしき 秋のふりさけ 何れもくも

人よや 秋のふりさけ 何れもくも
清水寺のふりさけ 何れもくも

雲風のふりさけ 何れもくも
行秋のふりさけ 何れもくも
長月六日になれ 何れもくも
秋のふりさけ 何れもくも

ゆり秋の萩のや 青櫓耳
ゆり 姉花子と云はけき葉のい

夕ぐ部

桐葉の如く 一はら 一はら 一はら
惜しくも 一はら 一はら 一はら
此後 中 一はら 一はら 一はら
多き 一はら 一はら 一はら 一はら

江戸の如く

橋へ 一はら 一はら 一はら 一はら
一はら 一はら 一はら 一はら 一はら
山城 一はら 一はら 一はら 一はら
初 一はら 一はら 一はら 一はら
いつ 一はら 一はら 一はら 一はら

草庵

人 一はら 一はら 一はら 一はら
何 一はら 一はら 一はら 一はら

河田の旗城なる家ありて

高のしるべきものなるに種あり

る。いふにきく。河田のふた

もあやうく人もいふとに降れ

新集のおとあて早あし。これ

河田のあやうくもいふとに降れ

作。あやうくの旗城なるに種あり

人のいふにきく。河田のふた

初。あやうくの旗城なるに種あり

一。あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

あやうくの旗城なるに種あり

先師之梅山先生歸而後就

[illegible]

竹
画
韻

不^レや^レ布^レか^レ強^レま^レる^レ事^レ也
 風^レや^レ頰^レを^レれ^レて^レむ^レ人^レの^レ顔^レ
 三^レ州^レ風^レ来^レ事^レ也
 不^レ教^レ風^レ千^レ名^レ以^レと^レか^レる^レ松^レ石^レ也

國府城舊石櫓跡今所宅

東也あまの葉のうらやみはは
多の石櫓跡なりとて

まふふあまのちとてと落葉川
之尺の山もあまの木のこゝろの南
平田の照寺ありあまの石櫓跡
えくはなは二つ

百年の京もとて庭のあまのこゝろ
こゝろのうらやまのあまのこゝろ

道園居士の芳名はまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ

あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ
あまのこゝろのうらやまのこゝろ

鶴坪中 小坊と云ふやと取引
玄床子旅籠をきき常根に喫し
即ちのち根をうきぬし
うきぬの夜をききぬるやと云ふ

防川亭

香代探の梅をぬきし新鴛のや
むら根お咲にふん保良の里
打ちとる花は探をくくし根
芥子焼やすうい梅の田井はる川氷

社園の庭をきき

まきとくしよきし庭をきき
はれいしよあはれいしよ
多山の石をきき庭をきき

二物中

茶のむしとくしよきし庭をきき
鳥のむしとくしよきし庭をきき
保川は鶴成物也
有るやと云ふしとくしよきし庭をきき

のししおしし 浅木の花
浅木の花をさしとけくさ
物やうさしとけくさあ
ふ中か子供とけくさ

うしやふ花のはなを
南都ふ

初雪やうし 大仏のもうし
猿行

うしやふ雪小僧のうし

うし雪やうしとけくさ
はつやうしとけくさ
おまをうしとけくさ
雪見ふしとけくさ

市ふしとけくさ
猿ふしとけくさ

うしとけくさ
おまをうしとけくさ
中ふしとけくさ

いさうらに雪ふりやふゆふ所まで
河の音は作人きぬ世はら
は〜き〜たの後志望の国を
後きり〜〜〜〜〜人津
松中河〜〜〜〜〜る
う〜〜〜〜〜のふき
少将の左の〜〜〜〜〜
附水脚

此ら之上を〜〜〜〜〜
つ〜〜〜〜〜馬も〜〜〜

小町書讀

そ〜〜〜〜〜
雪〜〜〜〜〜
竹〜〜〜

寒山一画賛

ふ〜〜〜〜〜
庭掃〜〜〜〜〜

油の心流よふきあき——後編つ
塩鯛や塩くさきもさ——魚の柳
煮きく洗ひつけめだきいひのな
あきき——帆く——家あ入ら
鳳来寺に糸籠——
夜更えう所く年くめだきあひ
ふり——も口生れきあきく大蛇だ
位つのお籠のしつねや至巨蛇
あきき世に——れいき

おのの後あて——山崎・大桶の南
かきあき——あき人々
埋あききゆや洞のききき
曲あきききあき
く——あきやあきあきあきの新法所
あきあきの質
ねさきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあき

新

自一而後多味なり

世もあつた宗師のやうに

三石主人一圖

月夜のうねりや海の家

葉のうねりもあつた秋の夜

とさうなうねりやうねり

うねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

うねりやうねりやうねり

芭蕉翁遺句集下

大尾

文化十己卯寅卯月五日

養老軒主

